

## <書評>仲程昌徳著『沖縄近代詩史研究』

著者	中江 泰子
雑誌名	日本文学誌要
巻	38
ページ	117-118
発行年	1987-12-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019543">http://hdl.handle.net/10114/00019543</a>

者に、晩年の模索の有様を一項設け論じて欲しいという願い切である。

(一九八七年三月 八重岳書房刊)

定価三〇〇〇円)

(大学院博士課程二年)

仲程 昌徳 著

## 『沖縄近代詩史研究』

中 江 泰 子

本書は、沖縄における近代詩を萌芽期の明治三十年代から大正期に至るまで詳細にあとづけた労作である。

従来沖縄近代詩史については、研究すべき資料の戦災による焼失、散佚といった悪条件下、十分な体系化がなされていなかった。著者はその困難な状況を、幸いにも戦禍を免れた離島の新聞資料や中央文壇の投稿雑誌、諸種の雑誌に着目し、収集、整理することによって解消した。よって、基礎的資料としても本書の果たす役割はきわめて重要である。

本書の構成は、〈序〉〈第一章明治前期〉

〈第二章明治後期〉〈第三章大正前期〉〈第四

章大正後期〉〈第五章中央雑誌への投稿詩〉、新しく発掘した資料の紹介と研究よりなる

〈付論1山之口獺の初期詩篇〉〈付論2山之口獺の短歌〉〈あとがき〉からなっている。

山之口獺については著者の既刊『山之口獺——詩とその軌跡』(法政大学出版局・一九七五年)があるが、新資料を得てのあらたな論考も俟たれるところである。

本論、各章の概要は以下に述べるとおりである。

第一章で、「新体詩」出現以前の状況、時代を反映する「軍歌」としての新体詩の出現、新詩の萌芽としての文明詠歌、沖縄の古歌謡発掘と琉球方言による表現の見直し、海外翻訳詩の登場などについて述べている。

第二章では、和歌と琉球の同居する沖縄的文学状況、新旧詩歌作者の交替、口語詩の出現、『海潮音』の影響による沖縄詩壇の夜明け、女性の表現者たちの登場、中央文壇への投稿詩について論じ、中央を指向するゆえの「琉球」であることの嘆きが深く影を落としていることを指摘している。

第三章で、明治詩の終焉——文語詩が口語詩に主流をゆずる——、さらに韻文から散文

へと移り変わる過渡的状況、「民衆詩派」の活躍について述べている。

第四章では、「童謡」の隆盛、伝統歌謡の見直しとしての「民謡」再生詩の出現、中央への憧憬と沖縄固有の風土と精神が共存する詩の誕生についてまとめ、第五章で、一章から四章までの論の展開を、新発掘の資料である中央雑誌への投稿詩できわだたせている。

著者の研究視点、「私の関心は(中略)戦争であり、言葉(二重言語の問題)であり、そして中央対地方という図である」(『近代沖縄文学の展開』三一書房・一九八一年)に沿って特に二、三述べる。

「沖縄における近代詩」は、沖縄が前近代と近代とを分かち指標を「言語的断絶」にみる、歴史的特異性を有している。それは、明治十二年(一八七九)の琉球処分(廃藩置県)により生活言語としての琉球方言の上に抽象的な概念をとまう知的言語としての共通語がかぶさり、その後、詩のことばとしての共通語獲得の歴史があったということである。

そのような近代詩のはじまりを象徴するのが明治三十三年に新聞に投稿された「新体

詩」と冠される「軍歌」であった。中央の文壇では明治十五年に『新体詩抄』が、三十年に島崎藤村の『若菜集』がそれぞれ刊行されている。また、時代は日清戦争の勝利による昂揚期を迎えている。しかしそれは、文学表現の媒体として共通語を手に入れ、「新体」という表現の様式を獲得しながら、中味は富国強兵の国策に乗ぜられた、内容の乏しいものであったこと、言いかえると、中央への同化を指向する沖繩が、中央の時代状況に組み込まれていったことの証しを現前せしめる詩であったことは、著者の指摘するとおりである。

また、「戦争」が不毛であることの証明として新聞詩壇の詩歌不毛の状態をあげ、沖繩にあつては古歌謡の発掘と方言による表現の見直しとして現われてくることは興味深い現象である。

近代化が中央の模倣に始まったゆえに、必然的に生じた足元と遠く中央との内的距離の埋め難さは、「中央対地方」の図にあつては多かれ少なかれどの地方においても同様であっただろう。が、やはり沖繩のそれは特筆できる。

本書のめざすところは、〈序〉によみとれるように、沖繩の詩人、詩作品を時代背景、内的風景とともに余すことなく描き出し、「沖繩の近代表現の特質」を取り出すことにある。文学の側面から沖繩の近代思想をも照射し、その試みは成功しているといえよう。

また、中央の詩の模倣から出発した沖繩の近代詩が、中央詩壇の影響を受けつつ展開してきたことに着眼し、詩人、詩作品の個々について常に中央の詩壇の動向と丹念に比較することによってその特質を明らかにしている。著者のこのような確かな方法論によって、中央の近代詩の地方における受容と展開という観点からも本書は示唆にとむ。

時代区分を、大きく明治期、大正期に画する特質は沖繩を否定するか評価するかであるとしている。いずれにしても、沖繩の明治・大正期の表現者たちは、固有の文化と主体性の喪失の歴史の狭間で常に引き裂かれた心情を抱き続け、その文学創造の状況は現在にまで続いている。現代の表現者たちもそのあわいに身を置かずにはいられないようである。

大正期、世礼国男の民謡再生詩をもってこの論考は閉じられる。沖繩的表現の本質を内

包する新しい詩の誕生を予感させ、さらなる論の展開が期待できる。

(新泉社刊 定価六〇〇〇円)

付・本書は、昭和六十一年度法政大学大学院提出の「沖繩近代詩研究」と題する文学博士学位取得論文の刊行である。

(大学院博士課程二年)

浦田 義和 著

『太宰 治 制度・自由・悲劇』

宮下 今日子

太宰治ほど評価の定めにくい作家はいない。一人の男、津島修治として、又作家太宰治としての生涯は、生と死・誠実とポーズ・抵抗と挫折……等の間での振幅が実に大きい。

一般的には『斜陽』『人間失格』などを以って、破滅型・デカダンの作家とし、その場合たいがい、弱さや滅びは美化され、ある種のがれの対象として肯定的に評価されてしまうのだ。

しかしもう一方では、戦時下の言論弾圧の